

近松門左衛門の辞世の文 この先も大阪についてさえずり散らします

3月に大阪大学を定年退職したが、現在も「おおさかKEYワード」の連載を続けさせてもらっている。

この連載は平成22(2010)年4月からはじまり、110回目の令和2(2020)年、百話を抜粋して『橋爪節也の大阪百景』(創元社)を刊行させていただいた。その後も「新おおさかKEYワード」と名を改めて35回つづき、今号は正統あわせて通算145回目となる。

よくも長く書き続けることができたものと思うが、執筆して脳裏をよぎるのが、近松門左衛門(1653~1724)の肖像画に描かれた辞世文(早稲田大学演劇博物館所蔵)である。

原文：市井に漂て商買しらず、陰に似て陰にあらず、賢に似て賢ならず、ものしりに似て何もしらず、よのまがひもの、からの大和の数ある道々、技能、雑芸、滑稽の類まで知らぬ事なげに口にまかせ筆にはしらせ一生囁りちらし、今はの際にいふべくおもふべき真の一大事は一字半言もなき倒惑(部分抜粋)

近松が自らを語った文章だが、「街で生活しながらも商売のことを知らず、隠者のようで隠者でなく、賢者のようで賢者ではない。物知り顔だが何も知らず、世間の^{にせもの}贗物、中国・日本の数ある教えや、技能、雑芸、滑稽の類まで知らぬことなしといった風に、口にまかせ筆にはしらせ、一生を^{さえず}囁りちらしたが、いまわの際に言うべき、思うべき真の一大事は、^{いちじはんこん}一字半言もないことに倒惑する」という意味だろうか。山田風太郎の『いまわの際に言うべき一大事はなし。』(角川春樹事務所、1998年)のもとにもなった名言である。



近松門左衛門肖像。『難波土産』より

この近松の言葉を読むたびに、ああ、私も同じと思う。「いちよう並木」にも、いろいろ書いてきた、さえずり散らしてきたときえ思うし、原文の「今はの際」を「退職の際」に置き換えると、定年の心境とも相まって、ますます他人事とは思えなくなる。そんな「おおさかKEYワード」だが、毎回、楽しみにお読みくださる方々もおられることが、ありがたくも誠に申し訳ないことである。

とはいっても、いいかげんなことを「いちよう並木」に書いてきたのではない。近松も辞世文の後に辞世の句をつけ

て、作品にこそ自分の思いがこもっていることの自信を示している。最初は少し卑下する語り口に、大文豪の矜持^{きやうじ}が秘められていると言えようか。

定年教授が好きな話をする、いわゆる恒例の最終講義は、3月21日に開いていただいた。たまたまお彼岸の中日にあたり、心おきなくしゃべることで、大学生活から成仏? できるのかも、と楽しかった。

最終講義の演題も近松を引用して「いまはの際に言うべき大事は一字半言もなき倒惑 一私の美術史、ミュージアム、大阪画壇一」とした。近松の言葉を引いたタイトルに面食らうなど、倒惑していたのは私ではなく聴衆だったかもしれないが、美術史や大阪画壇は、私の専門研究に属するテーマである。「橋爪先生の講演会の中で最も真面目な話だった」と、発起人の教授からご挨拶を頂いた。

それからひと月が経ち、暇を持て余して家の近所を散歩した。空堀商店街(大阪市中央区)の界隈である。空気の感じが違う。いつもは通勤路として急ぎ足で通っていたが、気の持ちようが変わると、街の見え方が変わって味わい深い。

近くにある「大大阪藝術劇場」では現代美術家の個展も開かれていたし、町家を生かした食料品店や雑貨屋、飲食店をじっくり眺めていると、新しい店が増え、おいしそうなものに溢れていることにも気づいた。

商店街の坂道を上って谷町筋に出ると、近くに近松門左衛門の墓(谷町8丁目)がある。近松の墓は尼崎市の広濟寺にもあり、谷町筋のものどちらも国指定史跡だが、久しぶりに谷町の墓石にお参りした。



近松門左衛門の墓(谷町8丁目)

「せまじきものは宮仕え」(「菅原伝授手習鑑」)とはいうが、これから自由な気分です「市井」を漂うことが出来るかと思うと、少しうれしくなった。

筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室(現・大阪中之島美術館)から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂一なにわ 知の巨人一」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ 一増殖するマンモス/モダン都市の現像一」(創元社)など。